

## 論文の内容の要旨

論文題目      **The Role of Positive and Negative Evidence in Form-Focused Instruction:  
Japanese EFL Learners' Grammatical Development**

(言語形式を重視した指導における肯定証拠と否定証拠の役割:  
日本人英語学習者の文法的発達)

氏名                      窪田 三喜夫

現在、日本では、リスニング能力とスピーキング能力の向上を目標に、コミュニケーション重視の授業が少しずつ行われるようになってきた。しかし、最近のコミュニカティブ言語教育 (Communicative Language Teaching) では文法指導が軽視される傾向にあり、その結果、意図している内容を伝えることはできるが、文法を正しく用いることはできないという現象が生じた。そこで、コミュニケーション活動を通じた意思伝達能力の習得を授業の目標に据えながら、適宜、学習者に言語形式を意識させるという指導法 (focus on form, Long 1991) が提唱されている。先行研究で、言語形式を重視した指導は学習者が中間言語文法を再構築する際に効果的であると実証されたが、具体的にどのようなインプットが最も効果的であるのかに対して明確な答えは出ていない。よって、本論文では、教師によるどのようなインプットが、文法の(再)構築に有益であるのかを実証的に研究した。特に、明示的文法知識の指導が、文法習得にどのような効果を及ぼすかの実証が本研究の目的である。更に、実験によって得た量的データを古典的テスト理論と項目応答理論の2つの側面から分析することにより、分析の信頼性を高めると共に、2種類の統計的分析の差についても検討した。研究課題は、以下の6点である。

- (1) どのようなインプットが、文法的知識と文法的コントロールの正確度の上昇に効果的であるのか。
- (2) どのようなインプットを与えることにより、指導の効果が長期的に持続するのか。

- (3) 測定値の変動は、指導によるものなのか。
- (4) 古典的テスト理論と項目応答理論に基づく分析結果に統計的な違いがあるのか。
- (5) 項目応答理論による個人能力推定値の分析において、2種類の統計プログラム (BILOG, RASCAL) により、違いは生じるのか。
- (6) 項目応答理論に基づく差異分析では、どの項目タイプで統計的な差異が生じるのか。

本研究では、コミュニケーションを重視した通常の授業での言語活動終了後に、以下のよう  
な指導を各実験群 (a) ~ (c) に対してそれぞれ行った (参照 Carroll and Swain 1993)。

- (a) 肯定証拠
- (b) 肯定・否定証拠と明示的メタ言語情報
- (c) 学習者の反応に対する明示的な否定と肯定証拠

肯定証拠とは、意味が明確な場面であるかを問わず、教師が文法的に正しい英文を提示す  
ることを指す。否定証拠とは学習者が用いた言語形式に対して、教師が非文法的であると指  
摘することを意味する (Sharwood Smith 1994)。明示的メタ言語情報とは、文法解説を指す。実  
験 1・2・3 では、上記の (a)・(b)・(c) の指導を、実験 4 では (a) と (b) の指導をそれぞれ  
行った。

コミュニケーションを重視した授業をうけている日本人英語学習者 (大学生 — 実験 1・2 :  
各 96 名; 実験 3: 63 名; 実験 4: 90 名) を対象に、以下の手順でテストを実施した。

- 「プリテスト」 — 指導前に実施
- 「ポストテスト 1」 — 指導直後、1 週間後のいずれかに実施
- 「ポストテスト 2」 — 1 ヶ月後に実施

実験 1・2・4 では以下の 2 種類のテスト (文法テストおよび産出テスト) を、実験 3 では 1  
種類のテスト (産出テスト) をそれぞれの被験者群に実施した。

文法テスト — 文法的知識 (宣言的知識) に関するデータを引き出す際には、文法  
性判断テストを用いた。

産出テスト — 文法的コントロール (手続き的・産出的知識、宣言的知識) に関す  
るデータを得る際には、和文英訳テストあるいは絵記述テストを用  
いた。

各実験で用いられた目標の文法項目は、以下の通りである。

- 実験 1 — 前置詞付き動詞、句動詞 (prepositional/phrasal verbs)
- 実験 2 — 心理動詞 (psych-verbs)
- 実験 3 — 関係節 (relative clauses)
- 実験 4 — 拠格交替 (locative alternation)

4 つの実験におけるデータは、分析の信頼性を高めるために、古典的テスト理論と項目応  
答理論を用いてそれぞれ分析を行った。群間の差を検定した際に用いられた能力特性推定値  
は、古典的テスト理論による正答数に基づく測定値を変換して得られた数値である。

4 つの実験の結果により、主に次のような点を実証された。

- (1) 全実験において「肯定・否定証拠と明示的メタ言語情報」という指導が、他の指導と比

べて文法的正確度の上昇に対し効果があった。学習者の文法的知識が(再)構築され、文法的コントロールも高まった。文法項目のタイプやメタ言語情報のタイプ (形式的 vs. 認知的)にかかわらず、同じ結果が得られ、上記の指導が最も効果的であることが明らかになった。特に、産出テストではその指導効果が1ヶ月にわたって持続した。本実験の結果は、口頭産出による追加実験を行うことにより、その妥当性を検証した。

(2) 指導が全体の測定値の変動に及ぼす影響を分析するために、オメガ関連度の測定を行った結果、本実験では、指導に対して大きな効果や中程度の効果が見られ、このことにより本実験の結果の妥当性が確認された。

(3) 項目応答理論に基づく差異分析の結果、実験1・4の産出テストで、「肯定・否定証拠と明示的メタ言語情報」という指導により、被験者は与えられたインプットに基づいて学習を一般化することができた。また、実験1では、\**take up it*のような「動詞 + 小辞 (particle) + 代名詞 *it*」の例外的な誤りに対しては、上記の指導が不可欠であることが項目応答理論に基づく差異分析で実証された。

(4) 古典的テスト理論と項目応答理論による分析の統計的違いに関しては、4つの実験すべてにおいて、古典的テスト理論による分散分析の交互作用の過小推定は見られなかった。日本のEFL環境において、項目応答理論が古典的テスト理論と同じように、実用可能であることが具体的に示された。

以上のように、「肯定・否定証拠と明示的メタ言語情報」という指導が、学習者の文法発達に最も効果的であることが、要因実験計画法によって明らかになった。この手法は、日本での英語クラスルーム・リサーチでは殆ど用いられていない。また、古典的テスト理論と項目応答理論による2種類のデータ分析という独創的な観点から、上記の指導の有効性が実証された。本研究は、流暢さに主眼を置くコミュニケーション重視の指導を行うのと同時に、文法的正確性を伸ばすために、肯定・否定証拠と明示的メタ言語情報を提示することの必要性を示唆している。